

ペンネーム



一筆堂

美しい毛髪があるとする。それは頭部にある時にだけ美しい。床に落下すれば、塵となる。人の命もまた同じ。流転するものこそが、真である。春は名のみ的小春三月。雨が雪の上に降っている。雨音のないその光景は、まるで静止画を思わせた。降りはじめた雨は、春のかほりを運びつつ、太陽の使者の役目を果たしていた。

「いや、雨が降っても、どうということは無いよ」カフェの中、カウンター席の瀬名アキラは、笑いながらつぶやいた。「もし、ずぶ濡れになったとしても、君に責任はないさ」

それは、帰ることを拒む、春を憂いた雨だった。

「あら、殊勝ですこと。どうしたの」カフェオーナーで美人の楡香が訊きかえした。「いや、たまにはね」

「ふうん、ところでどうしたの。浮かない顔して」「うん、最近どうも筆がのらなくてね」「そう」「ペンネームを変えてみようと思うんだ」「へえ、どんな感じ?」「そうだな、『水』に関連してものがいいかな、と思ってるんだ」

楡香は、コーヒーのお替りは?と聞き、頷いた瀬名のカップになみなみとコーヒーを注いだ。

「良かったら聞かせて」「うん」「『アマネ チアキ』というのはどうかな」「チアキ?」「うん、こう書くんだ」瀬名はそう言うと、ノートに「雨音智堯」と書いてみせた。「中国の名君『堯瞬』の『堯』を『智』(し)るという意味なんだ」「へえ」僕にはちよっと大げさかな、そう言うと瀬名は自嘲気味に軽い笑いをみせた。

名は体をあらわす、という。名前は本当に不思議だ。一文字一音で、すべてが変わる。だから言葉の魔力が最も籠ったものが、名前なのだろう。ひとりを認識するための番号ではない、綴られた一組の文字、「名前」。「名前」をいくつか持つことは、それだけの別も仮面をもつということに他ならないだろう。

からん。いらっしやい、楡香が出迎えたのは、瀬名アキラだった。今日もいつも通りの時間ね、と楡香がささやいた。

「コーヒー、いつもの」はい、と楡香が答えた。

実はね、瀬名が呟いた。今日はどうしたの、と観葉植物をどけて楡香が答えた。

「最近、筆がのらなくてね」ええ、と楡香が答えた。「ペンネームを変えてみようかと思うんだ」そうね、と楡香が応じた。「木にちなんだものにしようかと考えてる」

「たとえば？」「たとえば『三木春樹』というのはどうかな」「木が続くのね」

そう、と瀬名は答えた。「春樹はわかるね、僕の尊敬する人物だよ。そして、『三木』」「三木？」「うん、とても響きが純粹だと思うんだ」「そうかしら」「そうに決まってる」

「なら、いいんだけど」

雨が降ってきた。「じゃ、僕はこれで」「もう行くの？ 今来たばかりじゃない」「いや、なんとなく書けそうな気がしてきた。じゃ」

ありがとうございました、と楡香は見送った。

あちらを立てれば、こちらが立たない。情に掉ささば流される。さて、どうしたものか、と瀬名アキラは悩んでいた。

「どうしたの」常連のいつもの浮かない顔に、楡香は反応した。

「いや、いつものことなんだけどねえ、筆が乗らないんだ」「そう」「うん。それでね、ペンネームを変えてみようと思うんだ」「今度は？」「うん」

そういうと瀬名は原稿用紙を取り出して、大きく名前を書いた。「他所釜山」「これ、何て読むの？」「ヨソ プサン」「え？」「最近国際政治と俳画が気になっていてねえ、これをどうにか組み合わせられないものかと腐心しているんだ。無理かな？」「どうかしら」「まさに、あちらが立たねば、という感じなんだ」「うん」「でも、キムチもそうでしょ？」「え？」「きっとそうだよ」「そうかしら」楡香はなんとなく頷いた。

「ありがとう。何か書けそうな気がしてきた。コーヒーご馳走様。お代はここに。じゃ」「ありがとうございました」「プサンねえ。今日は焼き肉にしようかしら」

「今日は、冷えるねえ。雪だよ、雪」「かなり積もりましたね」「ああ」

カフェのカウンター席で話しているのは、作家見習いの瀬名アキラと店長の楡香である。

「いや、しかしなんだ。こんなに冷えると熱燗の一杯でもひっかけたくなるな」「残念ながら、熱燗はメニューに載せておりませんの。ホットコーヒーはいかが？」「ああ、それを戴こう」「少々、お待ちくださいね」「む、閃いた！」瀬名はそう言うとポケットに忍ばせたメモ帳にさっと何かを書きつけた。

「これがいい」「またですか」「またなんだよ、また」

メモ帳には「猫又 達磨」と走り書きがあった。「これしかない、これでいこう。じゃ」「瀬名さん、コーヒーは？」「ごめん、やっぱり帰って熱燗にする」「今度までご用意しておきますね」「ありがとう、猫又だネコマタ」

瀬名が開いた扉はカフェに冷気を招き入れた。

「足元が雪で滑って、いやいかん、スライドして、困るね全く」「受験生でもいらっしゃるの」「いや、そうではなくて、先日の新人賞公募に応募したんだ」「ああ、そうでしたか。手ごたえは?」「手応えというより、歯ごたえ満点で書いてしまった。少し無骨だったかな」「じゃあ、今日はゆっくりできるのね」「うん」「コーヒーかしら」「うん」「急に静かになってどうしたの」「実は、今思いついてしまったんだ」「まあ、またなの?」「またなんだ」「今度はどんなの」

瀬名はポケットからメモ帳を取り出すと、さらさらと書いて楡香の目の前に出した。メモ帳には、『鶴屋 満点堂』と書いてあった。「なかなかいいじゃない」「うん」「自分でも、この才能が恐ろしくなる」「ホラー並み?」「いや、スプラッタクラスだ」「怖いよね」「うん、怖いんだ。じゃ」「いつものとおりね」楡香は独りつぶやいた。

河原町

「おや、今入ってきた人は待ち合わせの方かな」作家見習いの瀬名アキラは入口の席のお客の顔をうかがった。「うむ、なかなかの美人だ」「そうね。美人相だわね」

「もし、君があ的女性を小説に登場させるとして、名前を付けるとしたら何と付ける？」
「え？」「僕なら……」瀬名は原稿用紙を取り出して、ペンで書きなぐった。「こうつける」「どれどれ、『河原町？』」「うん、いまにも一句ひねりそうじゃないか。待っている顔も、実にいい。まるで、麻雀でアガリ牌を待っているかのようだ」「短歌と麻雀なのね」「そうなんだ」「よし、次の登場人物はこれでいこう。物語は麻雀放浪記をベースに作ってみようか。女版麻雀放浪記。キャッチコピーまで決まってしまった。じゃ」

「お気をつけて」榎香は、心配そうに見送った。

「いや、もうすぐ春かな、この陽気は」「いらっしやい、瀬名さん」「うん、いつもの」「はい、ブレンドコーヒーですね」「それだ!」「えっ、ブレンドコーヒーですか」「そう、そいつだよ、それ」

瀬名はカウンターに座るなり、いつもの口上を始めた。「ブレンドだ、ブレンド。つまり混ぜ合わせるんだよ。組み合わせの妙だ。たとえば……、紫式部と吉田松陰を掛け合わせて、む、これはさすがにやばすぎるな……。では、紫式部と夏目漱石を掛け合わせて、『紫 漱石』というのは、どうだろう?」「なんだか、不祝儀みたいですね」「そうとも。それは計算のうちなんだ」「包まなくてはなりませんね」「その通り。この際だ、たんまり包んでおこう。フィクションと一緒にね」「たまには、私のお店にも、なにか包んでくださいな」「考えておくよ」「いつになるかしら。その時は、ご祝儀袋をご用意しますわ」楡香が片えくぼを見せた。

「こんばんは」「あら、今日は夕方なのね」

「うん。実は筆がのっちゃってこの時間までかかったんだ」「それは、いいことね」

「ところで、いまカウンターで飲んでいる男性、あの方決まっているね」「たしかにそうね」「実は、閃いてしまったんだよ」「あの男性?」「そう」瀬名は咳払いをひとつすると、懐のメモ帳を取り出してなにやら書きつけた。『濁酒 小麦』

「飲んでいるの、ビールだよね」「そう、ノンアルコールだけど」「しまった。こっちだったか」そういうと瀬名はもう一度ペンをとった。『水川 流』「なんかかっこいいね」「そうだろ。後味すっきりだ」「水なのね」「そう、水なんだよ。ああ、僕もすっきりした。これで落ち着いて眠れるよ。じゃ」「相変わらず、お忙しいのね」楡香が呟いた。

「こんにちは。今日はいい天気だね」「あら、いらっしやい」楡香が瀬名を出迎えた。「ああ、いつものコーヒーを頼むよ」「はい」「最近ね、京都がマイブームなんだ」「京都?」「うん、寺社仏閣の京都だ。実はあの山水画の様なお寺の庭が大好きでねえ」「あら、そうなの」「そうなんだ。今、京都のお寺を舞台にミステリーを書こうと思っている」「面白そうね」「そうだろ。お寺の和尚様が主人公なんだ」「名前ね」「そう、こんなのはどうだろう。『満腹寺の石山湖水』「なんだか、カッコいいのかどうか、わからないわ」「そう、そこなんだよ」「うん」「少なくとも餓鬼地獄には落ちないと思うんだ」「たぶんそうね」「僕も、早いとこ戒名考えないとな」「え?」「いつも以上に力が入る」「あ、ちょっと、もう行っちゃうの?」「うん、これから住職に会ってくる」「あ、そう」

五役 赤丸

「懐かしいな、成人式のシーズンか」「あら、珍しく懐古趣味？」楡香が茶化した。「うん、まあ、そんなところだ。成人式といえば、同窓会と組みになるのが定番だね」「そうね、私の時もそうだったわ」「うん。同窓生が集まると、大抵、先生の話がでるよね」「ええ、面白い先生が必ずいるものですね」「そう、その通り。実は今度の小説、英語の先生を主人公にしようと思っている」「まあ、何て名前？」「もう、お約束だね」「それは言わない約束でしょ」「そう、その通り。名前は『五役 赤丸』先生だ」「三角より、丸が多そうな先生ね」「うん、僕もそういう先生に助けられた」「わたしもよ」「ね、みんなそうだ。そういう先生は、同窓生が集まったときに、絶対話題にのぼるんだ」「あと、変なあだ名の先生ね」「それに関しては、僕は謝るしかない」「そうだと思った」